

えがお がっこう あいさつで笑顔あふれる学校

なごや しりつりつちゅうがっこう 2年 竹内 ゆり

私の学校では、生徒会が主体となつて、毎週火曜日に「あいさつ運動」を行います。定期的に開催して、あいさつを定着させ、笑顔あふれる学校を作



〈笑顔であいさつ〉

じぶん て えがお 自分の手で笑顔に

たはらしりつたはらちゅうがっこう 5年 近藤 光紗

私は、赤十字奉仕団の人たちからマッサージの方法を教わりました。リラクゼーションやハンドケアをしてもらうと、体が温かくなって楽になりました。赤十字奉仕団の人たちがやさしく笑顔で教えてくれたので私も気持ち



〈ぬくもり伝わるハンドケア〉

えがお あいさつに笑顔

かひやしりつかりやちゅうがっこう 1年 たかやま 結衣

私は毎朝、学校に登校していきることがあります。それは、あいさつが少なくて、あいさつを楽しくできないかと考え、大きな声で「お」「は」「よ」「う」とみんなで続けて言うことにしました。すると、今までより登校のときに笑顔であいさつをする人が増えました。気づき、考え、実行することは必要



〈あいさつを楽しく〉

おも こころ 思いやりの心をもって

いちのみやしりつちゅうがっこう 5年 石垣 青葉

私は福祉実践教室で、車いす乗車体験をしました。最初は簡単だと思っていましたが、実際に乗ってみると少しの段差でも昇り降りが難しかったです。体の不自由な方は毎日車いす生活だと聞くと、とてもすごいと思



〈手を差しのべる勇気〉

あいち青少年赤十字

No.127 日本赤十字社愛知県支部
令和元年11月発行
〒461-8561 名古屋市東区白樺一丁目50番地
TEL (052) 971-1599 FAX (052) 971-1590
ホームページアドレス http://www.aichi.jrc.or.jp/

人間を救うのは人間だ Together for humanity

身近なことから始めよう
～気づき・考え・実行する～

かん いのち すく 簡易トイレが「命」を救う

おかざきしりつきたかほちゅうがっこう 2年 青山 花心

私は文化祭に来てくださった方々に、自分たちで作った簡易トイレを配付したり、使い方を教えたりしました。災害時の避難所では、水が止まる影響でトイレを我慢する人が多く、ストレスで亡くなってしまうことがあります。簡易トイレは自分の命を救う、とても大切なものだと



〈避難所での簡易トイレの大切さを伝えたい〉

はんい だれ 「できる範囲で、誰かのために」

あいちけんりつたかほちゅうがっこう 2年 後藤 優乃

私たちは、高浜市内の宅老所を訪問して高齢者の方と一緒に体操やレクリエーションをしています。また、学校祭では瓶のラムネを販売し、その売上げの一部を災害義援金として寄付しました。自分たちのできる範囲で、誰かに喜んでいただくボランティア活動を目標にしています。



〈チャリティーラムネの販売〉

せ かい とど おも 世界へ届けみんなの思い

あまやしりつりつちゅうがっこう 4年 荒井 颯姫

私は、授業で世界の子どもたちについて学習しました。世界には栄養失調や、汚れた水を飲むため3才未満で亡くなる子や、学校に通えない子がいることを知り、助けたいと思いました。全校集会で支援の必要な国の現状を伝え、募金活動を行いました。私たちの募金が支援の必要な国の子どもたちに届いて力になればと思います。



〈全校集会で呼びかける〉

支部通信

こ しんぶん 子ども新聞プロジェクト

過去の震災から学んだ教訓を子どもたちが自分の言葉で伝える子ども新聞プロジェクト。8回目の今回は、北海道胆振東部地震から約1年後の復興の様子と課題について取材しました。北海道は災害が少ないといわれていた地域。そのため、誰もが備えをしていない中で起きた今回の地震7の揺れ。そして、前夜に台風による大雨で大量の水分を含んでいたという悪条件も重なり、大きな揺れとともに一気に山がずれ落ちた厚真町。復旧作業は着実に進んでいきましたが、まだまだ山が何kmも崩れ、がれきがブルドーザーで寄せられたままの様子は、とても衝撃的で心に突き刺さるものでした。胆振東部地震では、震源地から約60km離れた札幌市内でも大きな被害がありました。道路の陥没や住宅が大きく傾く液状化現象がなぜ起きたのか、北海道大学工学部渡部教授に話を聞くことから取材が始まりました。

最大で2メートルほど陥没し、15度傾いた家には住むことは困難です。渡部教授は、火山灰の地盤と宅地造成する前は川が流れていた地形を指摘しました。実験を通して、液状化のメカニズムを学んだ子ども記者は、今後自分の住む地域が以前どんな地形であったのか調べることが減災につながることを理解しました。避難所となった厚真中央小学校、厚真町の特産品を栽培しているハスカップ農園、乳牛80頭を飼育していた安平町の金川牧場、鐘付き堂が全壊したむかわ町の法城寺。取材を通して、それぞれ大きな被害をうけなが



〈がれきが残る厚真町〉

らも、前向きに生きていく姿に子ども記者は大きな驚きと感銘をうけました。メディアに大きく取り上げられたことから「震災をパネに全国にPRしていく」というハスカップ農園の山口さん。停電、断水で乳牛を取り巻く環境は最悪の状態なのに、近隣からの牧場の牛を引き取る決断をした金川牧場の金川さん。反対する従業員に伝えた「こんな時は助け合い」の一言。そして、法城寺の住職、刈田さんの行動も目を見張るものがありました。東日本大震災でボランティア活動をしていた経験が



〈金川牧場での取材〉

ら、今必要なのは「物だけではなく心の支援だ」とSNSを活用して伝えたことなどです。子ども記者は、取材メモをもとに意見交換し、これら学んだことを共有していきます。大地震は起きないと、十分な備えはしていなかったという北海道ですが、この東海地方は、巨大な南海トラフ地震が予想されています。子ども新聞の記事として伝える言葉も地震は止められないが、被害は小さくできるという思いがしっかりと詰まったものとなりました。子ども新聞を読むことで、防災・減災につなげる活動のきっかけとなることを願っています。



〈ワークショップ〉